

津久井やまゆり園から地域へ ある女性の挑戦 6月12日NHK



『突発的な行動もあり、“見守りが難しい”』
と車椅子に縛られていた松田智子さん

いま、地域でくらす智子さん

津久井やまゆり園から地域へ ある女性の挑戦 6月12日

相模原市の知的障害者施設、『津久井やまゆり園』での殺傷事件から 来月（7月）で3年になります。やまゆり園で暮らしていた人たちの多くは、横浜市にある施設などに仮住まいしていますが、中には、地域で暮らすことにした人もいます。新たな生活で大きく変わった、ひとりの女性取材しました。



事件のとき、やまゆり園に暮らしていた、重度の知的障害がある松田智子さん（39歳）。いまは小さなグループホームで、5人の仲間と職員のサポートを受けて暮らしています。

ホームの中で自由に過ごし、豊かな表情を見せる智子さん。



しかし、やまゆり園では、足のケガをきっかけに、長年、車いすに拘束されていました。

事件前の支援記録には、『突発的な行動もあり、“見守りが難しい”』とされていました。

1年前、やまゆり園とは別の施設で暮らし始めた智子さんに、母親が、幼い頃 活発だった智子さんのことを考えて、地域での暮らしを体験することを勧めました。



理学療法士が体の状況を詳しくみたところ・・・

『ひざが伸びないね～』

長年の拘束の影響か、足腰や背中中の柔軟性が失われていることがわかりました。

『ここ、カチカチだ。背骨の動き自体が固い』



施設で、背中のかたさをほぐす取り組みを始めるとともに、散歩、カフェでの食事、美容室などにも出かける2か月の生活を体験。楽しそうな表情が出てきたことから、去年7月、グループホームに移りました。



グループホームでは、できることは智子さん自身がやることにしています。

『自分の衣類やタオルをしまう』『洗濯ものを干す』といった日常の行動が、生活する意欲の向上につながるの思いからです。



「興味のあることは自分からやろうという感じだったので『これはやろうか』と。大人として、最低限のことは自分でやれるように」と話すのは、グループホームの支援員。



毎日、周囲を散歩していると、地域の人から声がかかります。

『こんにちは～暑いね。採っていいよ』

『本当ですか！？ありがとうございます。ともちゃ～ん、ピワ！』



今年4月からは、週に2日、仕事もしています。

地域の資源回収です。集積所まで出しに行くのが難しい人の部屋を訪ねて受け取ります。

『はい ありがとう』



この仕事の中では大変なこともあります。

『頑張れ！最後まで。重いか・・・』

重いものも、職員に手伝ってもらって運び

『順番待ち！順番待ち！』

順番も、我慢して待たなければなりません。

生活支援員は「周りにあわせる行動は必要。身につけてほしい。智子さんにとっても すごくいい」といいます。



生き生きと暮らす智子さんの姿を、母親は頼もしく受け止めています。

「チャレンジして、失敗することもあるかもしれないけれど、そういうのも “生きるということ” かな。そこから得られるものも、あの人はきっと感じるし、生きるということではないかな」と話していました。